

# 刻む会

## たより

NO. 11

1994.5.20

長生炭鉱の「水非常」を

歴史に刻む会

(代表 山口 武信)

宇部市常盤一―一九(陣内)

☎083612118003

## 韓国のご遺族 を訪ねる旅

一九九四年五月二日

山口会長をはじめ<sup>ガ</sup>喪さん、藤井さん、柳井の四名は長生炭鉱水没事故による死亡者の遺族と目撃者を訪ねて韓国釜山へ向けて出発しました。

目的は長生炭鉱の水没事故の事実関係を正確に知ること、まだはつきりしていない遺族を調査することにあります。そして最終目標は追慕碑の建立と慰霊祭のできる場所を建設することにあります。一日も早く朝鮮人長生炭鉱労働者の魂が浮かばれる事を切望するのみです。

福岡空港一四時三〇分に飛びたった飛行機は三五分後には釜山(ヤムン)空港に降りました。金会長をはじめ六名の遺族代表よ

り熱烈な歓迎を受けました。日韓合わせて一〇名の代表はまず慶尚南道の道庁を訪問しました。私たちの目的を理解していただき今後の協力を仰ぐためです。

私たち一行に対応されたのは国際諮問大使の成弼柱という人でした。大使のお父さんも炭鉱労働者として連行されたと言っておられました。そしてあいさつの中で「自分も外交官の一人として慶尚南道をあげて私たち一行を歓迎すると共に、協力を惜しまない。なぜならあなたがたがこれからやるうとしてる事は日韓の一番大事なすばらしい国際交流だからです。振り返れば日帝の過ちがありました。隣国として両国民が愛を持って信頼し合えば素晴らしい事です。そしてあなたがたの大きな気持ちにこの運動を実際に実現することによって死んだ人達の魂も安らぐことでしょう。これからのあなたがたの運動に期待します。」と話されました。

《申世玉(シムセウ)》一九二二年生、七才二〇才の時に日本に行きました。一年数カ月長生炭鉱で朝昼晩、深い所に入って仕事をしました。一番奥までは二キロ半くらいで全く線路もなくキャップライトを着けて入って行きました。二番交替で一番は朝八時に抗内に入ったら夜中に終わり、二番が入って朝までやる一日十二時間勤務でした。

それから長生炭鉱が水没事故にあつてこの長生炭鉱の系列の炭鉱で仕事を継続した。別の炭鉱にも1カ月半ほどいた。(これは旧新浦炭鉱の二抗になる)

長生炭鉱の中に入ったとたん、周囲は人の背の高さの二倍ぐらいの板で囲まれ、どれほど力があつてもよじのぼれないような塀だった。とにかく命からがら逃亡したけれども運が悪くて捕まえられ再びもどされた時は素っ裸にして「坑夫たち皆見なさい、リンチがあるから」と木とうではなく革の帯を持って命が亡くなる程リンチされ、「二度とこういうまねはするなよ」というわけです。逃亡があつたのは水没事故の前のことです。

自分たちの部屋はすぐ側が海になっていて、共同便所があつた。部屋は真ん中に通

路があつて、その両側に畳一畳の巾で鰻の寝床のようになっていて、頭と足を互い違ひになるように寝ていた。

一日の日当が二円でそれで石炭をたくさん能率を上げて掘ってその箱の缶数によつて日当も少し良くなつていくと・・・。

自分たちが朝入ろうと思つて待機して宿舍におつたら真夜中に入つた人達が水没にあつた。その当時は全然外出できなくて警戒がひどかつた。だから記念に写真をとりたくてもぜんぜんできない状態だつた。

（長生炭鉱の系列みたいな炭鉱というのは新浦炭鉱が水没事故した後に再開しているんです。昔水没した炭鉱の水を汲み上げて、その炭鉱に申さんは再び入つて一カ月半ほど石炭を掘つてそれから辞めた。そのときの状況はどういうふうだつたんですか。）

新浦炭鉱も海水が入ってくるから穴をうめて再び始めたのが事故後十八年になるけどそこで一カ月半ばかり仕事しながら考えたのは、この危険な炭鉱で水没が再び起り絶対に危険を伴うと思つて、それを恐れてそこで長く働いたら命が亡くなる、韓国に帰れないと思つて辞めた。

（それは辞めることができたんですか）

自由に辞めることもできずに、ちょっと用事があるとか、そういう口実をつくつて事故の後だつたので休みをくれたと思うが、一日休みを取つて新川に出た。

たとえ、さつき話したようなリンチにあつても、数多い同胞が死んだその炭鉱で仕事しながら犠牲になるより、捕まえられたら捕まる覚悟をしてそれから逃げた。抗口がひとつだけど上を見たら海底だからしよちゅう上から水漏れがするから所どころ当たり前前の抗口がなくてもこつちも掘つてあまり水がようけ落ち込む所は掘れないから、こつちのほうも少し掘つたり、あつちも掘つたりして、あるときはよく聞いたら機関船の音がポンポン聞こえてくる。それでそこでたばこもガス気があつたら爆発するからガス気のない所を選んで一服吸う。もう疲れてきたときにはそういうこともした。

一番危険性の伴う一番深い所、海の水が漏れるそういう所に優先的に行かせて、日本の坑夫たちは掘つたものをただ運搬するようになつたかとか、それまで頭を使う余裕もなかったし、主に石炭を掘る連中はみんな朝鮮人で、日本人が労働賃金をいくらもらうかそれは記憶ありません。

（賃金についてですが、強制貯金とか、国債を買わされておつたという話があるんですが、それはどうでしょうか。）

貯金も会社に一任しておつたが自分勝手に自由行動できなかつたから郵便局にも行かれない。会社が自分の国のここならここに送つて下さいとお願ひしたけどまともに入つてきたものか、送つたものかはつきりわからない。

（国に送つたかどうかわからないということですね）

会社にそういうシステムみたいになつてみたいんです。健康状態がもうよつぽど耐えられないようなそういううめき声を出すような状態にならないと自由に休みもとれないし、家におるぐらいなら一番であれ、二番であれ入れと、そういうふうな全く人権蹂躪された状態で自由は全くありませんでした。おなかも痛いし今日は休ませて下さいって言つたらダメダ入れと、それでやむを得ず恐る恐る入つたけれど作業とかできないので、とにかく痛くて転げまわつた。おなかが痛くて転げまわる状態を抗内の監督が見て、見るに見かねて一応抗外に出て行けと、それで抗外に出て行つたら抗外にまた監督がちゃんと待つていて、それで仮

病を使って痛いと言って逃亡するかもしれんと言つて、キャップライトもちゃんと返すところに返して、監督がタコ部屋に連れて帰るそういうような状態でなんのスキもなかった。取り締まりが宇部新川やその近辺にも所所いっぱいおつて、何回も何回も逃亡してもとても逃げれなくて、それで袋だたきにされるところを何人もが見たつて、そういう様子を見るからあんまり恐ろしくて自分は逃亡した経験はない。

ピーヤはかなり遠いような気がしたから、抗内の距離が四キロどころじゃないと、泡がぶくぶくあがるということは、この奥が四キロ以上のかかなり深い所から事故によつてピーヤからダーツとこんなに吹き上がったということだ。

(四キロというより実際は一キロの地点から吹き上がつております。穴を埋めるため一週間坑夫たちをつれて作業したけれどもとてもそれはできなかつた。一週間ほど作業して埋めるけどまにあわずに再び爆発してどうにも手がつけられない。畳みをいっぱい入れたという話があるんだけど、あとセメントやら放りこんだという。ポンプアップもやったらしいんですが、最初は調子よくいったけれども途中からポンプが焼

け切れてしまつていっぺんに水がダァと出て、結局だめになつてしまつた。聞いたのは一番最初どういふような募集の仕方であつて、どういふふううに現地の床波に行つたか、その経路なり募集の方法はどうだつたんですか。)

その時は警察官が来たのではなくて、日本の炭鉱の関係者が来たと直接日本に行つたら金もうけになるから申請しませんかと。非常に言葉巧みに言われあの当時は植民地で生活が困窮してやれんから、非常に苦しかったからということだ、各地方で申し込みなさいと、それで申し込みをしてトラックに乗せられて行きました。釜山に集まるわけです。全国的に募集で集めてそして関釜連絡船に乗せられて下関に着いた。

(釜山の前にテグとかどこかその近所で一度集まつたんじゃないですか。)

ただ非常に甘い言葉で日本に行つたら金もうけになりますよ、行きませんか、ごく自由にごく平凡にそういうふうに行つたら金もうけができると思つて募集に申請した。

(釜山に三順旅館というのがあった。秋さんという方はそこにだいた集まつたというんですが。それから釜山港に向つたというんです。みんな三順旅館に泊まつたということですが)

それでみんな安心しきるわけです。だから自由に金もうけになりますというから安心しきつて釜山まで行つたが、それまでは非常に丁重に扱つたけれど、関釜連絡船に乗つて下関に到着したと同時に、まなざしも右左を向いちゃいけん非常に厳しい。表情も完全になつてしまつた。下関に着くと同時に扱ひが変わつた。そして汽車に乗せられて宇部新川まで連れていかれた。

(事故のあつた日一月は真冬でしょう。)

四時ころ起こすから、なぜ起こすのかと起きてみたら、水の泡が噴き上げていた。海を見たら大変なことが起こつていふと思つた。もう夜が明ける前に水没してしまつた。(思つたより時間が早い)

本当に奇跡的に一八〇何人の中から日本の名字を豊田という人がそこから脱出して来たといふのです。戻つて来てそれから互いに3カ月ばかり会つたりした。この近年会つていない。その人が生存していて会えたら一番最高なんです。日本名では通称

豊田ということだけ知っている。戦後は本名なので村に行っただけでわからないですよ。

(事故があった時三日くらい大騒動になっていたらしいんですが、その時の様子だとか、事故の翌日四日に亡くなった人がいるんです。そのへんが知りたいのです。)

そのへんのこととはわからない。やっぱり飯場にいたのでわからないのでしょね。二〇才か二一才でそんなに事情に詳しくないでしょう。私と同じ年のころに来たわけです。私が十七に来て、申さんは三つ年上の二〇才に来て、

(長生炭鉱には一年八カ月働いたのですか、何月何日ごろでだいたい時期はいつごろでしたか)

あんまり寒くなかった。正月に何かあったんじゃないですか。正月には何かうまいものを食べさせてもらったとか、)

正月であれ、盆であれ日ごろと全然かわらない、いっさい何もない。

(食べ物の話でもうひとつ、つけものばかりだったという、塩づけみたいな大根とか、白菜みたいなものだったと聞いてますが)

ほとんど野菜類、ご飯、ご飯といっても働かせるためにおなかいっぱい食べさせて

いた。

(何か週に一回イワシが出たと聞いてますが)

それで日本の方は宿舍のすぐ隣に自由に街でも出れるけど連行された人たちは囲まれて一切自由なしの存在でした。

(辞められたときの話しを詳しく聞きたいのですが、いつごろどういうことでした)

十七年の二月三日の水没ですね、三日から一〇日まで作業をしていた、畳みを入れたりして。それで降食べていかなければならないから十八年になる以前に系列というかそれに似たような海底の炭鉱(二抗旧新浦炭鉱)に入って作業したけど、どう考えてもまだ危険性があるのでここは長く辛抱するところじゃなくて、それで一旦休暇を下さいと。そのときあいう大きな事故があったからある程度少し緊張の緩みがあったかもしれないが休暇をくれました。それで市内に行って捕まえられたら半殺しされてもそれまでだと覚悟して、それで大阪に飛びました。終戦になるまで大阪にいて終戦と共に帰国しました。終戦後の九月中旬、下旬ころ博多に行つて、あのころは帰国するのは博多か下関でした。もう船が混雑してよく覚えていません。運が悪いのは小さい

船にあんまり乗り過ぎて転覆して死んだり、機雷にぶつかって死んだものがいっぱいあり、台風で亡くなったりしました。

(かせいだ賃金の処分方法ですが、国に送るとかそういう契約が最初にしてあったんですか。)

契約は別にない。会社が責任をもって国に送ってあげるからというふうなそういう堅い契約も何もなかった。ただ金もうけに行かんかとそのかさされて行って、それで給料もらつてもおまえ達は自分で送る自由もないし、だから会社にあづけると言われ、国に送るものかどうするかを聞かれて、国の住所や宛名を教えて、それが全部送つたものかどうかはわからない。

(給料は月に一回決まった日にもらつて、それから食費やら何やら引かれたんですね) 引かれて、はじめの約束が二円、それから二円出すのも惜しかったんでしょ。募集の要綱には最初の訓練期間は二円と書いてあるんです。訓練期間が済んだら出来高払いになるんです。それで古参連中は箱もタツタツと先に取つていい場所だからパツパツと入れてさつとあがっちゃうんです。新参ものは一番悪い所に行つていつまでたつても二缶にならないという話しを聞いています。

(実際こちらに帰って来られて給料はいくら送ってあったんでしょか。)

炭鉱で働いたその金は親に聞いても全然はつきりしない。大阪に行つて終戦なるまで働いてのは自分の手で送つたから間違ひなく親は受け取っています。大阪で三年間働いて送つたその金で親はたんぼを買いました。

(現金は少しはくれたんですか。たとえばおばさんたちが売りに来るもちなんかを買える程度の)

もちを売りに来たのはあまり見たことないけど、シャツとか作業着などの衣類を売る行商人はたまにあつた。日本人の行商人が出入りしていた。売りにくるけど一回も買ったことはない。

(だけど逃亡して宇部から大阪に行ったわけで、その旅費などがあるわけでしょ)

いくら旅費ぐらひは自分でちゃんと握っていた。どれぐらひ手元に貰っていたんでしょか。月に少しは貰っていたんでしょ。そうそう二〇円ぐらひはやっぱり稼いでいたんです。はじめ一日二円であつただけど能率によつて給料をやるということで、だけどそんなに力強く要求してないからまあかろうじて月二〇円ぐらひの収入があつ

たんではないでしょか。今の金にしたらどのくらいになるんでしょか。



《李奇秀(キチウ)》 《申満述(シツマン)》

(李さんは、当時長生炭鉱にいたのではなく、厚狭にいたそうです。日本には15年間いたそうで、旧制名古屋中学を卒業されたそうです。となりの申さんは小野田のハギモリ炭鉱にいたそうです。申さんは八五才だそうです。)二人とも洪さんの亡父の友人だそうです。

私(李)は炭鉱ではなく、厚狭の町にいました。荒木大将とか何とかいうおじさんの店のところにいました。名古屋で卒業して、それから厚狭に来て、五、六年はいました。それから大分から帰国しました。

労務の者たちが強制的に入れと命令し、止む終えずに入つてああいう惨事がおこつた。はじめは、これ以上作業できないんだ無理だ、どんどん海水が入ってくるし、どうにもならない、作業できないという事で一応坑外に出たにもかかわらず、再び坑内に入れられた。坑口に出て、今日は水漏れ

がとても多いから作業できないと言つたら、以前にもそういう水漏れはあつたんだから、だから入つて仕事しなさいと。

水漏れが中間から漏つて、やってきた、たとえば坑内につつぱりみたいなのがいっぱいあるでしょう、だからいきおいすんどく水漏れがやってきたから、それもふさがれてとても中からはい上がつて出てくる人がいなかった、だけど一人が脱出してきた。(名前は、さっきの豊田さんという人ですか)・・・

(李さんのお父さんが亡くなられたのですか)

そうではなくて、洪さんのお父さんが亡くなられて、李さんと同じ郷里のかただから、そういう惨事の知らせがきたから一目散にかけつけてきたら、労務の上役が皆逃げてしまつていて誰もいなかった。

(いった日は何日でしたか、四日だったんですか)

三日に水没事故があつて、知らせがあつたのは四日か五日かしれないけど、とにかく聞くと同時に出掛けました。

(炭鉱の状況はどうでしたか)

あの時の状況は、言いなりにしか出来なかつた時代、何も抗議する力も何もなかつ

た。だから同族の愛として、こういう惨事があつたから出掛けていった。そして聞いたら、労務のものも事務所のものも誰一人としていない。仮に炭鉱に働いている人がいたとして誰かに、どういうふうにも水没してどなっているのかと聞いたとしてもその状況をぜんぜん誰も知らなかったでしょう。だからどうすることも出来なかった。ただ、行つて一応亡きがらを、遺体でもひきあげたらねんごろに葬儀でもしよう、そういう思いをよせて行つた。

この度、皆さんがどういう目的で来られたのか。会長さんから、ぜひ追悼式にいっしょに行きましょうとさそわれました。けれども、さそわれても費用を浪費しても目的を達成しなかつたら無意味だと思つて、先回の場合は遠慮しました。だから、皆さんが来た目的を誰が聞いても、私達が同族の愛として出来ることがあれば尽力しましょう。

日本の県庁も行政当局者たちは忌み嫌うでしょう。自分の子孫たちが良くないことをした事を、後々の方まで残すことは嫌うでしょう。しかし、私たちは歴史というものを創造し、一番大事な歴史を刻むという

事は、これこそ人間本来として当然のことです。だから、皆さんの目的と今後の活躍を考えたとき、これからもっと具体的に未来を展望しながら両者がどういう働きをしていくのかを、以前日本にいたときの事やいろいろ話し合いながら考えていきたい。

先輩が過ちを犯した場合、当然後輩がそれを正していく、たとえば炭鉱の主があるいはおじいさん、お父さんがした場合、彼には実質的な責任があるけれど、彼が亡くなつたとしたら、その子孫は道義的な責任を負うのは当然の事ではないかと思う。そうだとしたら日本の長生を担当する県庁や市のほうも、その時あつた事実だから当然責任を負うべきと思います。

皆さんのこの度の足取りは、人道的、道義的な面でじつに麗しい、美しい足取りです。私たちは、この問題に多いに期待をかけています。必ず成功するだろうし、成功する暁には靈魂たちは遠い彼方へ行つたけれど、安らかに眠るでしょう。

炭鉱主の孫になるか息子になるかしりませんが、当然道義的に考えて祭壇を築くための土地を寄贈するとか払下げるとか、そういう皆さんの決定的な交渉の結果があるのではないかと期待をかけていました。

(この間の経過を説明します。説明といっても説明するとこまでいってないんですが、一応今の現状なり経過をお話しします。県庁のほうも市のほうも同情はするけれど、今のところ祭壇を設けることは出来ないと言つてるわけです。何か大きな社を建てるような、そういう勘違いをわざととしているんです。というのは、何故かというところ、ようするに憲法の問題をもつてきて宗教がからんでくるという事を口実にして動こうとはしないんです。)

現実には、この問題以外にも国と国との、そういう次元での問題が山積みになつている。だから、私たちは民族の志し、民族の愛をもつて和合的な精神をもつて、この問題を着実に解決していかなばならない。もう一つは日本と韓国は切つても切れない密接な間がらだ、本当に和合してお互いが手に手をにぎりあつて、未来を展望しながら進んでいく、そういう両国の間がらだと思えます。

国と国とは既に李承晩大統領のときから、国の側では責任は終わったと、私たちが何回言つてもそういうふうには隠蔽するでしょう。だからいつまでもながびくんですよ、やはり市民と市民が大切なんです。



(頼尊さんの孫がいますけど、今までそこは相続争いで手がつかなかった、双子の兄弟がいますが兄弟ゲンカで解決がつかなかったのが、どうやら解決の糸口が見えてきたようです。)

どれほどの計画をよくたてても、実践が一番大事です。私たち民族が生きた事実を歪曲するのではなく、こういう惨事があつたということ、ありありと日本の二世三世の皆さんがわかるように、日韓関係で再び過ちをおこしてはならないという意味で、ひとつ身近な実践、たとえば土地確保が一番先決問題です。

(洪さんのお父さんと行き来があつたのですか。)

兄弟みたいなおつき合いをしていた。だから水没があつたと知って一目散に出掛けて行つたのです。

(洪さんのお父さんはどういう事情で、長生炭鉱に入られたのですか。募集方法は同じだったのでしょうか、条件は悪かつたのではないですか。)

その当時は募集の時代でした。金もうけに行かないかと、日本に行ったら金もうけになるから募集に申し込みなさいと、始めはそういう募集であつた。だから、やり方

はどこもいっしょで、ただ来てからが違つてたわけです。

(水が出るので危険だから、かわりたいたいという事はなかつたのですか。)

水漏れについては知らなかつたのでしよう。だから水没のあつたその日も、いったん入つて水漏れがひどくて出てきたら、もう一回強制的に入れさせられて、そういう結果となつたんです。

これから一坪いくらでわけて下さいとか、そういう交渉になつてくると思っています。一日も早く実現しますように、どうぞお願いします。

親しい友人でタマガワ・リュウという人がいたのですが、今でも元気でいるでしょう。山口県は私の第二の故郷です。

(あまりいい故郷ではないでしょう。)



《千谷之(チヤノヤ)》 《息子さんの全さん》

(その当時の写真をちょっと見てもらえますか、あれでも記憶がよみがえるかもしれませんので。)

小学校三年のとき、紀元二六〇〇年の記念のときの写真です。これは国民学校六年のときのものです。昭和一六年のころです。亡くなつた父は全聖道(センメイダウ)です。ここにいるのは母の千谷之(チヤノヤ)です。

父さんが水没で亡くなって、それで母さんと二人で、ここ、このレールに母さんを手伝つて三〇〇t〜五〇〇tの船に石炭をつみこんでいました。そういう作業をしていましたが、長生炭鉱が閉鎖されて仕事がないものだから社宅からおいだされました。おいだされて行くところが馬小屋で暮らしていました。おいだされたのは三家族だと思えます。炭鉱のすぐ真横だつたと思えます。焼き場があつて、墓場があつて、馬小屋がありました。福田テルオさん宅のものでした。その馬小屋で終戦になるまで三年間暮らしていました。

(水没事故がおきたときは何才だったんですか。)

昭和七年一月一四日生まれですから、小学校四年生、満一〇才ぐらいだったと思ひ

ます。

事故のときは学校に行っていました。長生炭鉱の人たちはみんな家に行け」と言われました。

(言われたのは何時頃でしたか。)

朝の一〇時頃だったと思います。西岐波小学校は高いところにあるので、ながめたらピーヤのところから水の泡がふきあがっていました。水をひくために坑内に入って作業した人の話だと入れるとこまで入ったら、遺族たちが慟哭の涙をだしていたそうです。

この捕虜收容所みたいにくまれた宿舎は、身長の二倍ぐらいの高い板がはりめぐされていて、その一番上には逃げないようにと高圧線をとりにまいていました。所帯もちは、子供がいるから逃げないからということでもこの中には入れずに、新社宅といって、ちょっとこぎれいなところで生活していました。

中には逃げだした人もいます。逃亡してつかまえられたら、リンチで半殺しにされて、それがもつて死んだ人もいます。その悲鳴が聞くに聞けないほどの呻き声だったのをおぼえています。

一週間交替で、夜一週間、昼一週間の二番交替でした。(申さんが二番交替で夜中に入ったものが、午前四時頃、ものすごく波がはげしくなって水没したと言っていました。朝の交替で、父さんに炭鉱に行つてらっしゃいと送ったあと学校へ行つて授業中に水没の知らせがきました。

長生炭鉱は今も床波だけ昔は駅がもう一つ長生駅があつて、つぎは常盤、つぎは草江だった、宇部岬、東新川、琴芝それからもう忘れしました。琴芝には電車に乗つてミズムシを掘りに行つてそれで釣りに行きました。

(今のところ誰も証言してくれる人がないので嘘かもしれません。この棧橋から船でつれてこられたという話が一部にはあるんですが、海からつれてこられたという話があるんですがどうなんですか。)

それは子供の頃だからわかりません。(お父さんが亡くなったあとは、そうするとトロッコ押しを手伝っていたんですね)生活には困っていました。床波はタクアンを専門につくっていました。それを払下げてもらつて下関まで行商に行つたり来りして、食うためにはそんな事もしました。

その頃、下関と博多は一目散に早く帰国しようとして全国から人が密集していたので、大勢人がいるからタクアンでももつて行つて売つたらもうかるということ・・・(その頃はそうだったかもしれませんが、終戦前の三年間はどやうやって暮らしたのですか。)

山口の先に篠目というところがあります。そこにおじさんがいました。徴用にひっぱられるのがおそろしいので、山奥で炭焼きをしていました。土曜日にヤミ籠に袋を一つお母さんが入れてくれるから、それをもつて小郡まで電車にのつて、小郡からは汽車にのりかえて行つて、土曜日はおじさんの所にとまつて、帰りには米を五升づつ袋に入れてくれました。そういうおじさんの援助があつたから生活できました。

兄さんは小学校三年生まで行つてたんですが、何か熱病で耳があまり聞こえませんでした。言葉もはっきりしなかった、それで学校もやめて、母さんの手伝いを主にしていました。一番末っ子の妹がお腹で三ヶ月のときに父さんが亡くなりました。母さんはそうして五人の子供を育てました。

(お父さんが長生炭鉱に入ったきっかけはどうだったんですか。)



よくわからないけど、韓国から募集されて、直接長生炭鉱に入ったわけではありません。始めは、福岡県ミズホ郡(?)トウゴウ町にいて、それから山口の前にいたところははっきりしないが、そこから長生炭鉱に行きました。

(おばあさんに長生炭鉱にいたときの生活状態を聞いてもらえませんか。食べ物なんかは炭鉱のほうから支給があったのですか。)

主人が坑内に入って、なんぼかの足しになるようにと積み込みの仕事をしていました。自由がないだけで、食べ物のほうは働かせるためにありました。捕虜収容所みたいなところであって、外出許可をもらわないと、常盤公園にも行けませんでした。けど外出許可をもらったときは楽しい一時もありました。所帯をもった家族にはある程度度の自由はありました。鉄アレイをかかえているのといっしょで、小さい子供を何人もかかえて逃亡出来ないからでしょう。

お父さんが金をもらおうというよりは、お酒も何も全部配給のようなものでした。給料からの天引ということですが、事務所の前に購買部がありました。

(おそらく、昔ばくらの近くの炭鉱にも

ありましたが、大福帳みたいなものがあるんですよね、そして買ったものをそこに書いて給料日に全部引かれるんでしょう。だから炭鉱は二重にもうけるんですよね。安くないから。だから生活だけはさせるけど給料のことは考えてないみたいですね)

(炭鉱で一番監督する立場にある人は誰でしたかね。)

(その人は労務の柴田さんです。)

それで、ほとんど坑内口までたどりつく寸前まで自分の力で上がった、ところが、その状況を生き証人として生かしたら後が大変なことになるということでわざと労務のえらいものが命がけでのぼってきたところを坑内に押し込んだ、だから力つきてしまった。出てこれないように板でクギをうって坑口をふさいで、生きているもの死なせたんです。

(原田さんが言うには、水が入ってきてツボ下?のトロッコをならべるところまで逃げてきたら水がいっぱいになったと、そして、あと二人ほどあがってきたと、助け出して毛布にくるんでつれていったというんです。その一人が李鐘天さんだし、一人が豊田さんだという事を聞いていますが、押し込んだとは聞いていません。だいたい

えらい連中は先にタタツとあがってしまったとは聞いていますが、押し込んだとか坑口にクギを打ったというのは本当でしょうか。)

最初はなかったけど、事故後には打ちつけてあったと思います。

(お母さんは船積みものトロッコ押しの仕事をしていたそうですが、それでいくらになつたのですか。)

長い年月がたってあまりはっきりしていませんが、いくらかもらっていたのは事実です。また弟の助けもあつたりして、そのへんは先程の話のとおりです。

(疲れていらっしやるよなのでもうこのへんで・・・おわり)

